注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
ＯＮＥ　ＰＩＥＣＥ　アンリミテッドドリーム　～羽ばたく天使と夢の狭間に～

【作者名】
陰陽の使者

【あらすじ】
世はまさに、大海賊時代!!

海賊王になることを夢見る少年、モンキー・Ｄ・ルフィは、海賊団「麦わらの一味」を引き入り、グランドラインの半分をわたることに成功。

十人目の仲間、「黒天使　アイル」とその相棒、「黒丸」を連れ、彼らがたどり着くのは、新世界の不可解な島。

そこで待ち受けたものは、文字通り、夢でしか起こらない冒険だった…

※アイルがどういうきっかけで麦わらの一味に加入したのかは、全体的な事情は書くつもりはないです。それはいずれ、別の小説として書くつもりです。

十人目

～???島～

「ん…」

朝起きる。空を見る。いつもと変わらない風景。

「…お坊ちゃま、おはようございます。」

ああ、やさしい執事さんが来た。

「…おなかすいた。」

「それはそれは。今日は何をお召し上がりしますか？」

「ん…トーストとベーコンがいい。」

「かしこまりました」

執事さんが部屋から去ろうとするが、ふと足を止める。

「そういえば、知ってますか？お坊ちゃまの仲間は、昨日の夜二人も増えました。」

「…ふーん。」

「とても強そうな方々ですから、ぜひ後でお会いしてください。」

「…うん。わかった。」

「では。」

そういい残し、執事さんは消えた。普通の日常だ。

さて…今日は何をしようかな…

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～新世界のどこか、サウザンドサニー号真上～

「…ん～異常なし、っと。なかなかいい出来ね。」

空中でおかしな乗り物に乗りながら、つぶやく一人の女性。隣に、真っ黒い鳥が宙を舞う。

「…よし。スカイバーのテストフライトはこれぐらいにして…あら？」

ふと、真下の船に注意を向ける。いや、船じゃない。その真正面の海だ。

何か海から泡が吹き出てる。何かしらと思うまもなく…

ザッパーーーーン

「…おお。海王類じゃんか。」

船ごと持ち上げるほどのでかさの頭を出し、巨大のまだら柄の怪物が現れた。そのでかさかと言うと…

「おお、おまえか。どうだ、それ？」

「ん、完璧よ。感謝してるわ。」

「あったりめーだ！このス～パ～な俺様の手に取っちゃ、どうってことねえ！」

船がが、空中の女の子に届くぐらいの高さへと持ち上げられるぐらい大きい。

「オイ、暢気に話してる場合か！食べられちゃうぞ！」

「うわぁぁぁぁ!!く～～わ～～れ～～る～～～!!」

「大丈夫、この位置なら、船は食べられないわ…海に落ちなかったら、の話だけど。」

「怖いことといわないでよ！何とかしなさい！早く！」

「は～～～～～～～いい！あなたのご命令なら、死んでもかまいません！ほらくそマリモ、おきろ！」

「ああ！けんか売ってるのか、エロガッパ！」

「にょほほ、しかし突然現れたから、思わず心臓飛び出ると思いましたよ。あ、私、心臓ないんですけど。」

海王類は、かなり凶暴だったが、それに対しての反応はさまざま。大慌て状態の人もいれば、まったく動じない人もいる。船の上は、まさに十人十色。

で、肝心の十人目は…

船のライオンの形の船首から、大声で叫ぶ。

「オイ、魚！ここからおろせ！船が進まなくなっちまったじゃねえか！」

「ちょっと、なに言ってのよ！海王類だよ、しかも新世界の！」

「ああ、今までのと断然格が違うぞ!!」

「挑発しないでくれ～～～」

「私、消化されるのはいやです！あ、でも、骨は消化されないんでしたっけ。」

悲惨に命乞いする三以外、ほかはにやりとする。

「へ…ちょうど退屈だった。相手してやる。」

「マリモは引っ込め！俺が徹底的に調理してやる！」

「今週のオレはス～～パ～～～!!オレ様に任せろ！」

「ふふ。後悔させてもらうわよ。」

「よし！ぶっ飛ばす！」

掛け声に対し、海王類はかなり怒りのこもったうなりだす。

たった一人、何も言わない人物がいた。空を飛んだ女の子は、静かに船のレールに歩き…

「よっと。」

船から飛び降りる。

「!?」「ちょっと！」

驚きの掛け声の間に、海王類は集中を船から、落ちる女の子に向ける。巨大な口を開け顔を乗り出し、船が落ち始める。

「ちょちょちょ！落ちる～～～～!!」

「いや、落ちるのは初めてじゃないだろ？」

「ちょっと黙れ！」

グオオォォォォォ!!

女の子を口の中に入れ、口を閉じる寸前のところで…

「剃！」

バクンと閉めるが、女の子はそこにはいない。閉まった口の、真下に現れた女の子は、海王類の首めがけて…

「指銃!!」

指を使った強烈な一撃。余りの痛みに耐えず、海王類はあっさり気絶する。顔が海の底へ沈み始めるところで…

「月歩！」

空を歩くように、女の子は落ちる船のデッキに戻る。タンと着陸して。

「戦闘員アイル！ちょっと活躍しました！」

ザッパ～～～～～ン!!

船が水面にぶつかるのと、海王類が沈みきるのが同時におき、大きな水しぶきが、船をぬらす。

「ああ！よくやった！」

ずっと船首から動かなかった、笑いながら女の子をほめる麦わらの船長は。

「ふん…それぐらいやらなきゃ、戦闘員の名は預けねーぜ。」

三本の刀を腰に差した、マストに腰掛た片目のもう一人の戦闘員は、。

「まったく、本当勝負馬鹿は…女の子とは思えないわ。」

露出度の高い水着と腕のログポーズを付けたは、あきれたように腕を上げる航海士。

「まったく、あなたのそれを舞う姿はいつもきれいです、アイルちゃん！もう惚れ直しました！」

ハート型のタバコを吐き、ラブラブダンスを踊る黒をまとうコック。

「よーし、よくやった！俺様の「魚捕り計画」は大成功のようだな！」

異常なほど鼻の長く、見透かした嘘を語る狙撃者。

「ええ、そうなのか！すげ～～！」

傾いた十字架の帽子をかぶり、あっさりと信じてしまう青っ鼻の医者。

「ふふ。やっぱり六式使いは侮れないわね。」

読んでいた本から目を上げ、やさしく笑ってくれる考古学者。

「ん～、ス～パ～！やっぱお前の空中戦は見ものだ！」

体を機械化して、腕を振り上げた決めポーズをする船大工。

「ヨホホホ！まったくあなたの戦い姿に、目を疑います。疑う目はないですけど。」

骨しか残ってない体で、しょうもないジョークで自分で笑う音楽家。

「カァ、カァ！」

女の子の肩にとまり、まるで褒めるかのように元気よく鳴く黒いカラス。

「みんな…ありがとう！」

それらをうれしくてたまらなくて、笑ってしまう灰色のパーカーをまとった、もう一人の戦闘員。

「よおし、野郎ども！冒険を続けるぞ！」

「おお！」

元気良い叫びとともに、猛獣の王を記した船は、今も広く、残酷な海を渡る…

出航！幻の島、夢幻卿（ナクロワ）

「うーん…おかしいわね…」

「どうしたの、ナミ？」

「あ、アイル。偵察は終わったの。」

「うん。特に何もなかったよ。」

「そう…なかなか着かないわね。」

ここは女性室。現在、地図を懸命にチェックする航海士、ナミと、それを後ろから見守る戦闘員、アイルがいる。

「まだ着かないの、その…不思議島。」

「ついにルフィみたいなこというのね…」

「いや、むしろルフィが言い出したことだけど…」

「…まあいいわ。この地図を見る限り、もう見えるはずなんだけど…」

ナミは、地図上でペンで丸をつけた島を指差した。

「私たちはここよ。」ナミは、その島から少し右…つまり、東に少しずれた点に、船型の置物を置く。

「へえ…結構近いのね。何も見えなかったけど。」

「そこなの！船からしか見えない私たちはともかく、飛ぶことのでき

るあなたが見えないのはどういうことよ！」

「私に聞かれても…ごめん、ほんとに。力になれなくて。」

「…もう、いいわよ、謝らなくたって。」申し訳なさそうに言い、地図を凝視する。「あんたに怒鳴って、突然現れるわけもないしね。」

「う～ん…やっぱ、伝説かしらね？」

「もしそうだとしても、あの馬鹿船長は聞かないでしょうけどね。」イラつきの現況を思い出し、ナミの拳のペンはひび割れる。

「確かに。初め知ったときは、もう大はしゃぎだったからね。」

アイルは、数週間の出来事を振り返る…

～～～

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～数週間前、とある島～

「夢幻卿(ナクロワ)？」

「そうだ。このあたりに出るらしいんだ、その幻の島が！」

「幻って…あなた、それ見てわかったの？」

「ああ、俺は言ったことねえが、そこへ冒険しに行く若者がいるからな。」

「で、彼らは…？」

「全員、行ったっきりで帰ってこねえ。うちのダチも、その一人だ。」
「…ご愁傷様。」
「まま、気にせんでええ。あいつもかなりバカやってたからな。一人騒がしいのが減っちまっただけだ。
（そういうのは、涙拭いてからいうものだよ…）
「で、その…不思議島？何かあるわけ？」
「不思議島か…おもしれえこと言うねえ、譲ちゃん。」
「じ…譲ちゃん…？」
「んん…噂だけどな。そこには、ある秘宝があるってわけだ。」
「秘宝…どんな？」
「さあ…帰ってきた人はいねえから、それを確認するスベがねえんだ。」
「…じゃあ、おじさんはどう思うの？」
「…ここにさっき言ったダチの書いた地図がある。」
「え！どうしてそんなものが…」
「空瓶に入れて海をさまよってたんだ。その地図には、ホレ、ここだ。」

「…この島？ずいぶんと正確な形になってるわね。」

「あいつは、画家の腕は確かだった。頭冷やしてそっちをやってれば、うまく暮らせたっちゅうのに、ほんとおおばかだった。」

（ずいぶんと仲のいい友達だったのね…）

「で、これは僕の勘違いかもしれないが…この島こそ、夢幻卿（ナクロア）だと言うわけよ。」

「え、でも…この島、現在地（ここ）からそう遠くないわ。確かめることは…」

「もう確かめた。」

「…で、どうだった？」

「何もなかったんだ。ある曇りの日に、うちの町から、大量の船が行ったんだが、そこはただの海の一面。石ころひとつもなかった。俺も一緒に行ったから、それは確実だ。」

「…それじゃ、やっぱり存在が…」

「ケッ！俺は認めねえ。」

「おじさん、やっぱり飲み過ぎじゃ…」

「これはまだ初盤だってんだ！まだ飲んでるとは言えねえ！」

（うちの戦闘員とまったく同じセリフ…）

「いいか！うちのダチはよ、大ばか者でおっちょこちょいで、いつも腹

立つ野郎だった！」

「なんかひどくありません？」

「その癖にな！一度も嘘をつくことはなかった！子供のころから、たった一度もな！」

「…」

「そんな奴が、こんな大事で、嘘をつく理由も訳もねえんだ！」

「おじさん…」

「ほかの連中は、あいつを夢見るバカだと言うが、それこそ嘘だ！俺が保障する！」

「…」

「…ちっ！笑うんだったら、笑え！」

「…そうする前に。」

「ああ？」

「その地図…借りていいんですか？」

「…何する気なんだ…テメェ、まさか…」

「ちょっと…調べてみたいの。」

「…ちっ。勝手に取っていけ。」

「え…いいんですか？」

「俺はもう、酔いすぎた老いぼれだ。おめぇの冒険にかかわることはねえ。勝手にしていけ。」

「…じゃあ、そうさせてもらうわ。」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～現在～

「…でその地図を見せたとたん、ルフィさんはもうノリノリで。なぜかウソップさんも信じちゃったし。あれは何のことかしらね？」

「さあ、ね？」不思議に笑ったナミは、再び地図を眺める。

「ともかく、存在しない島を解決しない限り、ここへいけないわけね。アイル、もう一度聞くけど…」

「ほんとにないのよ。ついでに島のあるはずの場所にも行ったけど…」

「…あああ、もうどういうことよ！私に大いなる秘宝が待ってると言うのに！もし着かなかったら、あんたに十億借金もらうわよ！」

「あえ、そんな！」

「だってあんたが振り込んだ話じゃない！まったく」完全に頭を机に振り落とす。「船長は冒険冒険と大はしゃぎするし、誰も助ける気は

ないし…」

「大げさだよ、ナミさん…あら？」

アイルは、ふと、ドアの向こうから近づく何かに気づく。そっと耳を立てて…

「…ふふ。噂をすれば。」

「は？なんの…」

「ナァァァミィィィィ!!」

「え！この声！」

「まだかぁぁぁ!!」突然女部屋に突っ込む男。麦わら帽子をかぶり、勢い良く伸ばす腕はナミの肩を掴む。

「まだか！俺はもう退屈だぞ！」

「まだだよ、もう！ちょっと困ってるから、黙っててて！」

「いや、もう待たん！さっさと不思議島へ到着しろ！船長命令だ！」

「無理！アイルだって確認したのよ！存在しない島にどうやって到着するのよ！」

「俺は知らねえ！お前航海士だろ！」

「航海士を何だと思ってるの！」

(またこの調子か…)揉め事をはじめてしまった二人を尻目に、アイルは再び地図に向ける。その地図は、とても良く描かれてるが、矛盾は確かに存在する。本当に幻なのか、それとも何か引っかけなのか…そこはどうしたものか…

「カァ〜」

「ん?どうしたの、黒丸?」肩から地図の上に降りた鴉に問いかける。黒丸は黙って、幻の島の描かれた場所を爪で引っかき始めた。

「あ、コラ、黒丸、大切な地図に…え!」

相棒を叱るところだったが、引っかいた部分に変化が訪れたことに気づく。アイルはもっと良く確かめるように、顔を近づけるが…「

ガタン

「おぶ!」突然部屋全体が傾いてしまったため、顔を机にぶつけてしまった。喧嘩中のルフィとナミは、倒れてしまい、ルフィがナミの上にのっかかった状態に。

「うわ!なんだ〜こりゃ!」

「あいたた…何事よ!ちょっとルフィ、どきなさい!」

「あああ、髪引っ張るな!…てゴムだから平気だった!」

ルフィを髪から引っ張りながら、ナミはデッキに駆け上がる。

カァカァ!

「んん、何よ本当に…」意識を整い、再び地図を見る。

「これは…あ、まさか、そういうことか！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜サウザンド・サニー号、デッキ上〜

「おい、ゾロ、起きろ！一大事だぞ！」

「ん…ふあ〜あ。何だ朝か？」

「もう昼過ぎだ！それより、大変なことに…」

「ちょっと、どうしたのよ！」

ちょうどウソップがゾロを起こすのに成功した頃に、ナミとルフィが到着する。ほかに、アイル以外の一味も集まってる。

「ああ、ナミ、ちょうどいいとこに！ちょっとみろよ、これ！」

ウソップが指差した方向に、とんでもない光景が描かれていた。

「げ！これって…」

「おおお！海のバームクーヘン！」

「違う！渦巻きだ！」

船は、巨大な渦巻きの波に巻き込まれ、どんどんと中心点に向かっ

てゆく。底なしに見える海の穴は、今も船を飲み込むのかのように、大きく開く。

「まずい！すぐに脱出しないと…フランキー！」

「ん？ス～パ～だって？」

「言ってない！すぐにここから脱出よ！急いで…」

「待って！ここから離れちゃだめ！」

いつの間にかアイルも到着した。片手には、夢幻卿（ナクロワ）の地図が握られている。

「ちょ…！どういうこと！だってここは…」

「わかったの！幻の島の秘密！」

「ほんと！さすがアイルちゃん！美しいさに会う豊富な知識をお持ちに！」

メロメロサンジを無視し、アイルは地図を開いた。すぐに、ロビンが地図の変化に気づく。

「あら…ここに文字なんてあったかしら？」

「ちょっと地図をこすると、現れたんです。たぶん、ちり紙を上に軽く載りつけたんだと思うけど…」

「これは…「この島、海のものであらず」、ですか…なんか無責任な感じですね。ニョホホ。で、頭がカラの私に、意味がわかりませんが…」

「つまり、幻の島は、海に接してないってことよ。信じられないけど、そうなると…」

「「「「「…空島か！」」」」」

空島。新世界に突入した前に、ルフィたちがかつて、上を向く記録指針（ログポーズ）に従い、たどり着いたところ。ルフィ、ゾロ、ナミ、ウソップ、サンジ、チョッパーは懐かしそうに叫ぶ。ロビンは、一味としての最初の冒険を思い出しながら、微笑む。

「なるほど…誰も見つからなかったわけね。」

「そう。でもおそらく、地図（これ）が存在する以上、空島（そこ）へいく手段はある。それは…」

「あの、皆さん。ライオンちゃんが、揺れ止まりましたが…」

「え？」全員、海へ向く。馬鹿のようにでかかった渦巻きは、もはや姿を消し、代わりに静かな水面に成り果てている。

「なんだ…ス～パ～呆れる大事だったな。」

「ニョホホ！もう、二度目に天国に訪れるかと思いましたよ。」

だが、ほかの八人の反応はまったく異なり…

「来る！サンジ、ゾロ、帆を張って！」

「は～い、ナミさあぁ～～ん！オラマリモ、さっさと行くぞ！」

「うっせえ、エロコック！そっちこそどけ！ジャマだ！」
「まずいぞチョッパー！どっかつかまれ！…て、鼻もげる!!」
「あああ、吹き飛ばされるぅぅぅ!!」
「ふふ…楽しみね。」
「ああ、何だ？」「皆さん、どうか…？」
「フランキーさん、ブルックさん。」空島に行った事のない二人に、アイルは説明する。「天国に行くのは…これからです。」
「え！冗談はよしてください！」
「空島は無論、空に存在する。そこへ行くには、普通に船に乗ってもたどり着きません。だけど…ちゃんと存在するんです。そこへの、道が。」
「ナミさ～ん！帆を張りましたよ！」
「オッケー！アイル、舵頼む！」
「分かった！そっちも、航海よろしく！」
「オイ待てアイル！その方法って…あ？」
突然、平面だった水面は、船を真ん中にしてボコッと噴出す。
「何だ！何が起こるんだ！」

「何って…幻の島、夢幻卿(ナクロワ)へ行くのよ。」代わりにロビンが答える。

「天空まで流れる、渦巻きを前触れとする、「打ち上げ海流(ノックアップ・ストリーム)」で。」

「行くぞ不思議島！出航だ～～～！」

ルフィが船首に立ち、拳を天空へと向け叫ぶのを合図のように…

ドッゴオオォォォォォん…

巨大の海水の柱とともに、サニー号は空の彼方へと消えてゆく…

ついに到着！空に潜んだ夢の島！

「…ん」

最初に起きたのは、アイル。舵の隣で仰向けのまま気絶していた。胸に一つの、大きくて黒い鎌が置かれている。その曲がった船全体は、とても静か。

アイルは記録をたどる。確か、打ち上げ海流（ノックアップストリーム）から天空へと飛び立ち、ナミの航海術で、無事雲を進入し、そこから…思い出せないが、たぶん息が切れて気絶したのだろう。結構深くて濃い雲に違いない。

「黒丸。」アイルは返事する。

とたんに、鎌は変化する。杖の部分が、だんだん短く、そして太くなり、二つの翼を生やす。とがった刃は、きらめき、くちばしとなるやがて鎌は、黒い鴉の姿へとかえる。

「大丈夫？」カアァ「…そう。大丈夫みたいだね。」

やさしく黒丸の頭をなでた後、立ち上がる。ほかのみんなを起こそうと、デッキに出たとたん…

「うおおおおおお!!来たあああああ!!」

「あ、起きたの？」

真っ先にルフィの元気良い声で、ほかのみんなは起き始めた。みんな同じように息を切らし、また気絶しそうな状態だった。

「おいみんな、見ろよ！」

「何よ、ルフィ…！これは！」

船は白い雲の海を航海していた。これはもうすでに面識があるから驚かない。驚いたのは、その海に浮かんでいた、大きな物質だった。

「いやッほおおお！」

「いよっしゃあああ!!」

「空島だぁ！」

なんと雲の上には、さらに高く空にそびえ、浮くのが不可能に見えるほどの巨大な陸地とその周りに玉雲に乗った岩石が浮かんでいた。過去に訪れた「アッパーヤード」よりもはるかに大きく、大陸といっても間違ってないほど。

「ここって、あの空島…違う！だけど…」

「う～ん…」アイルは地図を再び見る。「確かに空から見ると同じ位置だけど…念のため、調べますか。」

パーカーを脱ぎ、黄色と白のシマシマに鷹のマークが付いたシャツで、少しストレッチして…

「少し上へ行ってまいりま～す！」

シャツの背中に空いた二つの穴から、真っ白の巨大な羽を二つ生やし、天空へと飛び立つ。

「んん〜〜やっぱり俺たちの天使は最高に美しい〜〜!!」アイルの残した羽の道を眺めながら、サンジはメロメロ状態へとおちいってしまった。

「アホ。そう威張ることないだろ？」

「そうだ。おめえだって空を飛べるんだろ？」

怒り爆発!!

「黙れ！ロマンのねえこと言うんじゃねえ！アイルちゃんのような天使に失礼だろうが！」

「まあ、確かにそういねえよな、そういう人は。」ウソップは自分の考えを言い出す。「あいつの話だと、「生まれつき」羽が生えてたってゆうし。アイルって、ある意味ユニークだな。」

「うんうん！」チョッパーも割り込む。「それにやさしいし！いつも僕たちと遊んでくれるし！」

「悪魔の実の影響なしでも、飛ぶことができるなんて、さすがよね。」ナミはサンダルを脱ぎ、船の横へ駆け寄る。「久しぶりのビーチを味わいましょうか！」

「ああ、待て！俺も行くぞ！」

「このキャプテンウソップ、泳がせていただくぜ！」

「俺も〜！マフマフ雲ないかな〜」

「え、何ですか、それ！肌によさそうですね！まあ、肌はありませんけ

ど！」

「ふふ…相変わらずね。」

「ほんとです、ロビンちゃ～ん！あなたほど明るい太陽ほど合うものはいません！」

「アホか…」

「アァ！」

「おーし、サニーは任せろ！オメえら全員遊んで来い！」

～～

「ふーん、この離れた小島は、あの雲の岩石だったのね…そして、あれが山…高いわね。」

地図を参考にしながら、アイルは羽を軽く羽ばたかせながら真上から見た島の形を地図と見比べる。確かに…小さくて初めは印象が残らないところの部分も、この島ではくっきりはっきりと見極めることができる。

「うん…どうやら間違いないようね…さて。」

地図をジーンズのポケットにしまい、うーんと腕も羽も伸ばす。

「ちょっと天空の更なる空を楽しみますか！それ！」

羽を止め、空中落下で頭から加速するこの気持ち。風が自分の体を

弾幕のように気持ちよくすり抜け、自由落下という感覚にとらわれる。なんともいえないこの瞬間が、数秒しか味わえないのが残念だ。

下の森林に当たるかあたらないかのところで…

パッツ…

再び閉じた羽を開ける。すると…

「イヤッホオオォォォォ!!」

羽が空気と抵抗を利用し、自由落下から急上昇を始めた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「…?今、何か聞こえなかった?」

「空耳じゃない?」

「そう…かな?」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「さいこ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!」

空中回転、ノーズダイブ、直線飛行。アクロバティックな動きと羽の多彩な動きをものにして、アイルは高スピードで空を泳いでいく。黒天使の異名を物とするその動きは、

アイルは、夕焼けが訪れるまで、空の遊びを楽しむ。

…下の森から睨む、黄色い目に気づかずに。

「遅い！何してたのよ！」

「ご、ごめん…余りにも気持ちよくて…」

「コラ、アイル！お前のせいで、肉が冷たくなっちまったじゃねえか！」

「うるせえ、クソゴム！少しはアイルちゃんに気ぃつかえ！」

「カァカァ！」

迷い鳥

「…ん。」

朝起きると、女部屋の窓からの雲にさえぎられない暖かな朝日。まあ、雲の上だから、曇りという天候はないが。

「うう…二日酔い…？やっぱり酒はなれないな…」

別に嫌いってわけでもない。ただ、ゾロやナミのような大酒豪でもなく、一番酒の経験のないアイルにとって、昨日のような宴の後は、どうしても頭が痛くなる。複数な意味で。

（でも、仕方ない。この一味だから、むしろこれぐらい慣れなきゃいけないし…）

昨夜、ルフィの提案により開かれた「夢幻卿（ナクロワ）お宝前夜祭」（ナミ提）は、いつものようににぎやかだった。大発見をしたあとのせいか、いつもよりにぎやかだったような…まあ、麦わらの一味ときたら、それが基本だけど。

…本当に、いろいろあった。アイルが一味に入って以来の短い時間を振り返る。

魚人島のときも、パンク・ハザードのときも。

あらゆる強敵と戦ったり、思わぬ仲間ができちゃったり。

信じられぬ真実を付きぬけ、それでもなお突き進んで。

最後は決まりのように、戦ったもの同士、敵も味方も勧誘した宴を開いて…

本当に、いつも騒がしい。

「ん？黒丸？」

カァ～

「あ、ちょっと、どこへ行くのよ！そっちは森よ！」

だから…あの時、憧れたのかもしれない。

「ああ、もう、何なのよ、この鎌ガラス！」

初めて、麦わら（みんな）と出会ったとき…

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「八千七百十七…八千七百十八…」

欠かせない特訓を行うゾロの声で、じょじょにみんなも目を覚ます。

「んん、昨日は飲んだわね～。ねえ、アイル知らない？部屋にはいないけど。」

「そうね。いつの間にかいったのかしら？」

「どっかで飛んでんじゃないか？もしかして、空飛ぶ猪怪獣を見つけ

たりして。」

「ええ～！そうなのか！」

「何だそれ、うまいのか⁉」

「へえ、そりゃ調理のやりがいがありそうだ！」

ウソップのホラ吹きを本気にしてしまった三人の会話と、朝食が作り上げられる香ばしい香りとともに、作戦会議が開かれる。

「はい、こちら、林檎とハニーの愛の煮込み合わせです、ナミさん。今日の私の自信作でございます。」

「ん、ありがとサンジ。さあ、みんな、聞きなさい！」

まだ帰ってこないアイル以外全員が座ったところで、ナミは拡大地図を取り出し、島の南側の浜辺を指差す。

「今、私たちはここにいるわ。で、お宝は、きっと島のどこかに潜んでる！」

「ああ、そうだな。で、どこだ？」

「知らない。」

「何だ、その根拠なしの自信！」

「オイオイ、てめえこそナミに信頼持て！」ウソップに強烈な蹴りを送り込むサンジ。「きっとナミさんはおすばらしい作戦を立てているはずだ！黙って聞け！」

「でも、確かに知らないことばかりね。」ロビンは冷静に鋭く、「もし、財宝があったとしても、どこを探すか。それぐらいの目的もほしいわね。」

「そこよ！」ナミは見計らったかのように、指差す。「ここで、今日の日課を発表するわ！」

「お、おい、ナミ、まさか…」

「そう！「幻の島お宝目印探索作戦」よ！」

「おめえ、それ今作った名前だろ！」

「ああ、いいな！冒険のにおいがする！」早速ルフィはやる気のよう。

「サンジ！特大海賊弁当！」

「あいよ。」

「ちょっと待って、ルフィ！まだ大切なことを忘れてない？」

「ん？何だナミ？」

「ロビンのいうとおり、ここのことはまだわからない。当然、怪物とか化け物とか、怖いものばかりかもしれないのよ！」

「知らん！俺がぶっ飛ばす！」

「そう！あなたの役目はそれよ！」

(暴れてもいいんだ)全員、頭の中でつぶやいたのは、いうまでもない。

「でも！もしものことが起こったときの逃げ道も用意するのも大切よ！」

「えええええ!!昨日来たばかりなのに、もういくのか！」

「そうだぞナミ！男としての誇りはどこ行った！」

「女よ！だって怖いやついたらいやじゃん！」

「そうだぞ！ナミさんやロビンちゃんの身に何かあったら、どう責任取るつもりだ！」

「あほコック…そんなびびる事ねえだろ。」

「アァ？誰がびびってるって、このクソ剣士！」

会議開始五分後。すでに混乱状態。それに終止符を打ったのは…

ドッゴォォォォォ!!

島の奥の森から鳴り響く、大爆発。

「!!」

全員、戦闘態勢を急いで整えるが、とたんに不要なことがわかった。爆発以外、何も起ころうとしないからだ。

「…まあ、これでわかったわね。この島に何かある！」

「こ…コエェ！」

「ななな、なにびびってるんだチョッパー！あ、あんな爆発、ｄｄどうって事…」

「なな、なんと！もう耳が爆発しそうでした！耳がないのに！」

「この面子があれば何とかなるだろうけど…」ナミは全員を見渡す。抱き合うチョッパーとウソップとブルックを尻目に。「責めての保障として、島を探検する「探索組」と、サニー号を死守する「船番組」を作るわ！」

「ああ、俺俺！俺絶対冒険！」

「俺も、行くぞ！久しぶりの息抜きにはなりそうだ！」

「おれは残るぜ！このサニー号を守れるほどの変体はそういねえからな！」

「俺もだ！この船の副キャプテンとして、絶対船を！最後の息を引こうと！」

「まあ、ルフィとフランキーは決めといて…」ナミは森へと目を向ける。「アイルは探索組として…ほかのみんなは、これで決めてもらうわ！」

「え…お、おい、まさか！」

ナミの手には、七本のクジ。

「この中に、「ハズレ」が四本！「探索組」五人と「船番組」五人なら文句ないでしょ！」

「ゲェ！」

パンクハザードで起こった悪夢を思い出してしまったウソップは、ナミに拝む。

「お願いだ！絶対！船番にしてくれ！金なら払う！」

「ち…またこれかよ。」ゾロは、一本のクジを引く。赤い先端を見て、笑う。「ま、当然だけどな。」

次にサンジ。

「おお、勝利の女神様よ。どうかナミさんと同じ時間を長く過ごせますように。」

地獄のように燃える信心を持ったサンジが引いたのは、先端が白のクジ。船番の役だ。

その後、チョッパー…

「あああ！誰か変わってくれ～～～！」

ブルックも引き…

「あれま、お気の毒に、チョッパーさん。」

「ブルック！役目変わってくれ～～！」

「ええ！いやですよ！」

さらにロビンは…

「…あら、船番ね。残念。」

いよいよクジは二本。赤と白が一本ずつ。ウソップは再び余り物の勝負と向き合ってしまった。

「よ、よおし。落ち着け。落ち着け、俺様！」

「いい、ウソップ。私が探索になっちゃったら、罰金三億ベリーよ！」

「余計なプレッシャー掛けるな！よ、よーし！」

彼から見て、右側のクジを握り…

「この一生…いや、いっそのことこの大いなる地球の全ての運よ！ここに集まれ！ノ～リャ～～～～!!」

勢い良くクジを引く。息を止めるナミとほかのみんなが目撃者。ウソップはは目を閉じたまま、クジをなかなか見ない。

「…なんだ、ハズレか。残念だな。」

やがて沈黙を崩したのは、ルフィ。

「な！何だと！」

ウソップは慌てるが、同時に…

「ちょっと、待ってよ！」

っとナミも叫ぶ。明らかに全然うれしくなく、視線はウソップの持つクジ。

…先端が真っ白の、一本のクジ。

「…へ？」

「ああ、確かに、外れだ。」

「当たりだよ、ゾロ！ウソップ、変わってくれ!!」

「へ？へ？」

「うふふ…運がよかったわね。」

「おう、長っ鼻！船の修理を手伝わせてもらうぜ！」

「へ？へ？へ？」

「ちょっと…なんで、こんな純粋な私が、凶暴の島を探索しなきゃいけないんだよ！不公平よ！」

「だってナミ、お前のクジだろ？当たりなのに、いかねえのか、冒険？」

「うっさい！ルフィは黙れ！」

「へ？へ？へ？へ？」

「…てめえ、ウソップ。」

成り行きをただただ呆然と見届けるウソップの後ろに、爆発的に燃

える視線。

「なんてことを…しやがった…」

「う…」

　そっと振り向くと、そこには一人の魔王。全ての獲物を凍りつかせる眼差し、口から吹き出る情熱の煙。地獄の炎で暑く鍛え上げられた立派な脚は、容赦なく…獲物を捕らえる。

「このやろせっかくナミさんとラブリータイムを過ごす予定だったのにありったけの恋をこめて作った料理をどうするつもりだ一万回おろすぞこの野郎！」

「い、いや、あの、その、ゆ、ゆる…」

「地獄のそこまで燃え落ちろ！地獄の思い出（ヘル・メモリーズ）!!」

　世界中の運も持っても…不幸しか訪れなかった者悲鳴が、空中鳴り響く…

　地上で、空から聞こえる、ゾッとする音は、後に「天使の悲鳴伝説」として語られる…

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あれ、何かしら?なんかの動物?…ってそれより、黒丸!見つけた!」

　やっとの思いで相棒に追いついたときは、アイルはもうすでに森…

いや、さまざまな華やかな花や太い蔦からして、ジャングルのかなり奥まで入り込んでしまった。いつでもそこを出られサニー号へ戻れるアイルだが、それでもとても不気味なジャングルと感じた。

「ほら、さっさとこの薄気味悪いところから出るわよ！」

カァカァ

アイルの指示に従わず、黒丸はアイルの指し指の反対方向へと飛ぶ。

「ああ、もう！なんかおいしいものでも見つけたわけ？確かにいいにおいはするけど、そういうのは信じちゃだめ！サンジの料理でいいじゃんか！」

そういいきったところで、黒丸がある場所に立ち止まったことに気づいた。

「やっと、止まった…何これ？花？いや、違う…」

黒丸が乗った石像を、アイルが興味深く観察する。花びらの形をした門で、特にどこにもつながってない。普通に通ることのできる、トンネルのよう。その穴の上に、球の形のへこみがあり、何かをはめ込むようだ。

「なに、これ…人が作った？この幻の空島で？誰が何のために…ええい、ロビンがいたなら！」

せめて一味一緒に発見したかったアイルは、黒丸を背中に誘導する。

「ともかく、戻るわ。黒丸、またここへこれるかしら？」

カァ！と自信満々に羽で大きな胸をたたく黒丸。

「わかった。早くみんなに知らせて、何かわからなくちゃ。」

「その必要はねえ。」

「!!」

突然どこからもなく、男の声が響き、飛び立とうとするアイルは動きを止める。黒丸は急いで、自分を鎌に変形して、アイルの横の地面に突き刺さる。

「…誰？どこにいるの？」

背の高さの鎌を構えながら、アイルは周りを見回す。しかし、緑が密着した場所では、視界がとてもよくない。

（く…こう光がなくちゃ…よし、見聞色で！）

「誰なのかは関係ねえ。大切なのは、お前がここにいることだ。」

（…後ろ！）

すぐ後ろから人の気配を探知したアイルは、再び不思議門へ振り向く。そこには、いつの間にかひとつの影が、門にもたれかかる。彼の帽子のせいで、顔は良く見えない。

しかし、その人物を見て、アイルは驚く。だって…

「まあ、お前が要るってことは、あいつもいるってことか。」

「あ、あなたは…」

不思議霧

「ナミ、肉やろっか？一個だけ。」

「いらないわよ！それにどこ行ってんだ！全然違う！」

「え？北だから、寒い方に行くんじゃ…」

「アホ…ったく、気合入れねえから、簡単に道を見失…」

「あんたは真逆だぁ！」

「ゾロぉ！いつか方向音痴も治せる万能薬になるから！それまでの辛抱だぁ！」

「…うぐ！」

深い森の中を歩く三人と一匹。男二人、女一人、人間トナカイ一匹は、まっすぐ北を目指して進む。

「ってゾロ！いつ木を登れと言ったのよ！北と上は違うと前言わなかった！」

「あぁ⁉なんだと⁉」

「ああ、ルフィ！その棒、どうしたの⁉」

「欲しいのか！やらねえぞ！」

「よし！棒、棒…」

「コラそこ！うろうろすんな！」

まっすぐ、進む…

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜サニー号、看板上〜

「んん、ん、ん〜♪アウ！」

「にょ、にょ、にょほほのほ！」

「こ、と、し〜の〜、お〜れさ〜まは〜♪」

「巨大な海を、駆け抜ける〜♪にょほ！」

「男のロマンを背負いあげ〜♪」

「我らのヒーロー、絶好調！」

「スーパーアーマー！」「スーパーフラン剣！」

「「とどめはやっぱりジェネラル砲(キャノン)!!」

「ゆけ！奇跡の…」「合体ロ〜ボ〜…」

「「フランキーしょうぐ〜〜ん!!」」

「ん〜、スーパー！」

「んにょほほほ！」

「ふふ…楽しそうね。」

上は晴れ、下は曇り。

フランキーとブルックが楽しく歌いながら船の修正を行う姿を、ロビンが優しく見守る。

「ああ、すっごく楽しそう…」

活気も元気もない声が後ろから響いてくる。慌てず振り向くと…火傷と打撲傷まみれのモップ担ぎのウソップ。

「あら、全然楽しくなさそうね。」

「うう…人生最悪の時だぁ！「当たり」を引いたのに、この様…」

「「ハズレ」だったんじゃないかしら？」

「おう、間違いなく「ハズレ」だな」

「ハズレでしたね。」

「ブルックてめえ！同じクジなのに、何でお前は「当たり」なんだ！」

「…さあ？」

「その幸運、俺にも分けてくれぇ！」

「嫌ですよ！」

「オラ雑用！片付けは済んだか！」
「は、は、は！ただいま！」
急いで看板を吹き始めるウソップ。「俺が副船長（キャプテン）なのに…」
「ああ、愛しいロビンちゃ～ん♡！甘いデザートの時間ですよ～！」
ラブコックからイチゴの乗ったケーキを受け取る。
「ああ、サンジさん！私の分は？」
「ついでにコーラも頼むぜ！」
「ああ、だったら俺も…」
「てめえは黙れ雑用！そしておめえらはキッチンだ！」
「おう、分かった！」「にょほほ！」
「あめえら、裏切るのか！」去ってゆく二人の背中にウソップはありったけの恨みをぶつける。「ともに戦った勇敢な戦士を！お前ら見捨てるのか！」
「いいからさっさと働け！まだ半分も終わってねえじゃねえか！」
「ああ、もうわかったよ、もう！」しぶしぶとモップを動かすウソップ。
「くそ、アイルがいたら絶対手伝ってやるのに…」
「あいにくだけど、アイルは一応「探索組」よ。…それにしても…」

「なかなかもどらねえ…！まさか、何か身に危険でも…！」

「彼女に限って、それはないと思うけど…」

「いや…それとも…」サンジは何か思いふけたらしく、新たなタバコに火を付ける。

「ん？なんだ？」

「何かしら？」

「アイルさんは…華麗なる騎士の迎えを…」

「えー後はあそこだな。」

「ふふ、頑張ってね。」

「おう！このキャプテンウソップ様、当たり前のことをしてるだけだ！」

「人の話聞けぇ！」

「空島…なんて久しぶりかしら…」ロビンは二年前に訪れた空島を思い出す。「私が一味として始めて冒険した島…正直、海以外になるとは思わなかった。」

「ああ、スカイピアか！あそこのシャンディアは勇敢だったぜ！あと、あの変な騎士も！」

「そういえば、コニスちゃん元気にしてるかな？僕の事覚えてくれて

るかな～♡」

「アウ！おめえらそういえば行ってたな！スーパー気になるぜ！」

「よければ、聞かせてくれませんか？歌が作れそうです！」

「いいぜ！」フランキーとブルックの前に、ウソップはモップを剣のように前に突き出すポーズを取る。「そう！すべては、天空からの落し物から始まった…」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「どうしましょうか、お坊っちゃま。」

「…？何のこと？」

「今朝来た船の事です。」

「ああ、あれ…適当に処理すれば？」

「いえ、しかし…」

「何？なんかあるの？」

「ハイ…こちらをご覧に…」

「手配書…？…へえ、四億…」

「彼は、あの海賊船の船長です。この額から、かなり凶暴な男だと…」

「ふーん…で？他には？」

「察しのとおり。これが、船員全員の手配書です。」

「全員…すごいね。」

「いかが致しましょう？この島に隠れた二人の件もございますし、これ以上勝手にするには…」

「…分かった。僕がやる。」

「お坊っちゃま…」

「パパッと済ませるから。」

「…かしこまりました。」

～～～

「すみません…」

「何、お前が謝る事はねえ。どちらかというと、俺の方こそ…」

「その話なら、済んだはずです。」

「…だな。」アイルの意思の詰まった顔を見て、帽子の男はニヤリとする。「ともかく、今言ったこと、ルフィに伝えてくれないか？」

「あなたは来ないんですか？」

「…俺は、俺の仲間を助ける。」

「…でも。」

「おめえのおかげで、俺は今ここにいる。ありがたく思ってる。だけど…」

「…分かってます。でも…」

「…！おい、待て！」

「え？私、まだ何も…」

カァカァ!!

「…！」始めて自分の周りを取り囲む物に気づくアイル。

「これが…」

～～～

「何だこりゃ？不思議霧か？」

「ああ…おそらくな。」

「ちょっと、何よこれ！いきなりなに!?」

「おお！なんかうまそう！食べられるかな？」

～～～

「ん、何…」

「「ギャアアァァァ!!」」

突然後ろに現れた黒く滲んだ虹色の人影に恐怖に叫んでしまうウソップとブルック。船から降りて逃げようとするも、不可能だとすぐに悟った。

「囲まれた〜!!」

「何ですかこれ！人間ですか、これ？」

「クソ、霧が元凶か？全員オロしてやる！」

「どうやら、少し荒れそうね…」

「スーパー任せろ！ぶっ飛ばすぜ！」

船番組全員、謎の人影と戦う大勢を取り始める。大半分は気合満々だ。

そのせいで、海雲に起こった変化に、誰も気づくことはなかった…

〜〜〜

ルフィの黒い拳とゾロの飛ぶ斬撃で、前方の人影を消滅させるが、まだ敵が多すぎる。

「しつこいわよ、こいつら！突風（ガスト）ソード！」

「キリがねぇ！刻蹄（こくてい）　桜（ロゼオ）！」

ナミはタクトで、チョッパーは蹄で追撃を行う。しかし、人影がまだまだ増えてゆく。

「不思議霧の次は不思議人か！どうなってんだ、この島？」

「わかんないわよ！ともかく戦いなさいよ！」

「でも、霧のせいでどんどん来るぞ！」

「全員、気を引き締めろ！こりゃただ事じゃねえ！」

完全に包囲された四人の海賊に、人影が迫って行く…

「ＲＯＯＭ」

「!!」

周囲に半透明の空間が作られる。

「これは…まさか！」

「カウンターショック！」

とたんに…

ピシャーーン!!

人影の核を突き破るように、無数の電気が突き抜ける。麦わらの一味を完全に無視し、すべての人影を一瞬に攻撃し…

「あ…」っという間に、すべて消えてしまった。

「や…やったの？」

「全く、ここで手こずるとはな。」

冷たく低い声が、上から響く。見上げると、そこには腰掛けた…

「少し甘くなったか、麦わら屋！」

「トラ男！」

１０―５＋２

トラファルガー・ロー。

ルフィとゾロと同じ時期に、超新星と認められた大海賊。

「死の外科医」の異名を持ち、ハート海賊団を率いる若き船長。

王下七武海になる前にルフィを超える懸賞金４４０、０００、０００を掛けられた男。

かつて、四皇「百獣のカイドウ」を略奪する為、私たちと同盟をくんだことがある。異名とは逆に、思いやりの人だと覚えている。

目の前の男の、地獄へ行きましたという顔。左手に持った巨大な刀。両手の指に刻まれた「Ｄ・Ｅ・Ａ・Ｔ・Ｈ」の刺青（タトゥー）。髪の毛のほとんどを隠すひょう柄の帽子。

間違いない。

「久しぶりだな！トラ男！」

「ああ…しばらくだな。」

木から降り、私達に歩み寄るロー。その表情は、やつれとイラつきが混ざったように見えたけど、気のせいかな？

「こんなところになにしてんだ？観光か？」

「その性格は相変わらずだな。」

「そうか、元気か！ししし！」

ルフィ…本当に相変わらずね…

「お前の他の連中は何処にいる？」

「ん？みんなのことか？」

ルフィが戸惑う中、代わりにゾロが答える。

「まだ船番のはずだぞ。何か問題ある…」

「すぐ戻れ！」

久しぶりの命令と、厳しい口調に全員驚く。

「何でだ！せっかくここまで来たのに？」

「話は後だ！船へ案内しろ！」

ルフィの気持ちは分かるけど…計画性のローのこの慌てたような態度は、ただ事でない証拠。私も、多分チョッパーも、だんだんただ事じゃないと分かってきた。怖いのは嫌だけど…仲間をを見失うのはもっと嫌だからね！

問題は、あの冒険バカ二人が納得してくれるか…

「ああ、分かった！」

「エエ！」チョッパーの驚きは私も分かる「いいの、ルフィ！」

「ああ！トラ男は信じていいやつだ！」

「いや、そっちじゃなくて…」

「ともかく行くんだろ？」

何と！ゾロも行く気？

「だったら行くっきゃねーだろ。男なら、自分の道を切り通せ！」

「お…おう！」すっかりチョッパーもやる気満々になってしまった。そういう関係、よく分からないな…

「よし。確か道は…」

「チョッパー、ゾロを頼む。」

「よしきた。」

「な…」

「そしてあんた！」次に私は、ローを問い詰める。「私達を落とし入れる罠じゃないでしょうね？」

「…心配しなくとも、今お前たちを仕留めようと、得る物は無い。」

「そんないい加減な事が通用すると…」

「もう一度言う。」

「…！」思わず怯んでしまった。

別にローが怖かった訳じゃない。仕方が無かった。

あんな目つきをされても…

「今、仕留めようと…」ローは、目を隠すように帽子を調節し、先に進む。「得る物は無い。」

…何があったのかしら…？ローがあんなんなるなんて…

「そうか！じゃあ早く行くぞ！」

…全く緊張感の無い…

～～～

「おい、アイル！そっちはどうだ！」

「ええ、敵は簡単にやっつけられる！数はともかく。」

「よし！一気にやるぞ！アイル、飛べ！」

「！分かった！」

彼の狙いを一瞬に悟り、空に逃げる。その隙を見て、男は、巨大な攻撃を放つ…

～～～

てくる。よかった、これで安全でセーフなサニー号へ…

「ありゃ？」

ルフィの間抜けな声にみんなが反応する。ただし、それはルフィに対するものじゃない。

目の前が信じれなくて、立ちすくんでしまったのだ。一人除いて。

「…ここで間違いないのか？」

「…その…はずなのに…」私はあまりのことに驚いてしまった。

そこには白々海がそびえていた。水のように流れる雲が、砂浜に寄り、その手をそっと引く。その風景は、出かけたときとまったく同じ。

しかし…

「サニー号が…ねぇ…！」

その海に浮かんだはずの、私たちの船は、姿も影もなかった。

「なんだ…みんな、移動しちまったのか？」

「なんだ、みんなも冒険見つけたのか？ずるいな！」

「バカ！勝手に船を動かす訳ないじゃない！」

「でも、それじゃ、みんなどこいったんだ、ナミ！」

「知らないわよ！ほら離してチョッパー！考えがまとまらない！」

「…やはり遅かったか。」一人落ち着いたローがつぶやく。

「ちょっと！どういうことなのか説明しなさい！さもないと１００万ベリー罰金よ！」

「金の話してる場合か！」

ゾロの突っ込みを無視し、ローは冷静に、しかし緊張した空気で説明する。

「詳しくは知らねえが…この島には、妙な空気が漂ってる。」

「…ああ。不思議霧か？」

「まあ、それもあるが、本当の問題は、「気配」だ。」

「気配…そういえば。」

ルフィもゾロも、島の真ん中に目を向ける。そうか…「見聞色の覇気」で何か察知したのかも。

「この島に誰かがいる。それは確か。」ローは続ける。「そして厄介なことに…この世界を揺るがすほどの力を持つものらしい。」

「そんなすごいやつらなのか!?」チョッパーが耳を疑うが…

「仮に、新世界を後悔してた俺が…ここにいる。」

そうだ…ローは船ではなく、潜水艦を使って航海してる。それで打ち上げ海流（ノックアップ・ストリーム）を昇れるとは思えない。ローがたどり着いた方法は…

「まあ…おきたらここにいた、と言っても、信じてもらうつもりは。」

「うん、信じる。」

「早いよ、ルフィ！」…と、叫んだけど…

いわれてみれば、それしか納得のいきそうな方法がない。なにしろ、ここは夢幻の島。名前からして、ありえそう…かな？

「まあ、それはおいといて、だ。麦わら屋のことだ。仲間が心配だろ？」

「もちろんだ！」ルフィは強く叫ぶ。仲間思いの彼だから当たり前だ。

ゾロもチョッパーも、私も強くうなずく。今まで困難を乗り越えてきたみんなを、今、ここで見捨てるわけには…

「やはり…じゃあ、ついて来い。」ローは再び森へと向かおうとする。

「どこ行くんだ、トラ男？」

「お前の仲間を連れ戻すのなら…こっちに「戦力」が必要だ。」ローはつぶやく。「運のいいことに、もう一人、この島に連れてこられた男がいる。かなり頼りなる人物だ。」

「へえ、そんなすげえのか？」

「それと、お前たちと面識のある人たちだ。特に麦わら屋。」

「あ、居た！おーい！」

突然空から砂浜に華麗に着地し、羽を素早く服にしまう。烏は彼女の肩に止まる。

「アイル！どこ行ってたのよ！」

「ごめんごめん。黒丸が勝手に行っちゃうもんだから。」

カァカァ!!

「余計なお世話だ！って言ってるぞ。」

「それと、ちょっと馴染みと会って来たし。あ、ローさん、久しぶり。」

「アイル。そいつはもしかして…」

「ああ、話なら聞きましたよ、同盟を組むの。」

「え？そうなのかトラ男！」

アイルはどうやら、別の人物から事情を聞いたらしい。

「でも楽しみですね、麦わら・ハート海賊同盟。それもあの人も加わるとね。」

「あの人…さっきローの言ってた…」

「あ、来た！おーい！」

森から歩いてきた男は、ルフィより少し背が高く、なんか頼もしい存在と感じた。がっしりとした腹筋が丸出しで、ベルトからナイフを

ぶら下げたショーツの姿。帽子には二つの印があり、片方笑顔、片方怒りの顔と言う対称性を見せる。

ルフィは、まるで時間が止まったかのように立ちすくんだ。驚きと懐かしみの瞳はじっと、男のそばかすとウェーブの黒髪を見つめる。

「おまえ…」

「…変わらねえな、ルフィ！」

…炎のように強く燃える、兄の瞳…

「エース!!」

不思議門の果てに

～アイル視点～

ポートガス・D・エース。

「メラメラの実」の能力者で、「火拳」という異名を持つ。

ルフィとは義兄弟で、子供時代コルボ山で一緒に暮らし、十七歳で海賊の道を歩み始めた。

そして現在、白ひげ海賊団の二番隊隊長で、亡き白ひげに変わって船長となった人の二番手。

「よお、ルフィ！」

「エース！久しぶりだな！」

早速兄弟同士、仲良くじゃれあってる。いや、ぶつかり合ってる…のかな。

これはこれで妙な光景だった。何しろ兄弟の再会で、普通泣かないルフィが少し目が潤っていたから。

「無事だったんだな！死んだかと思ったよ！」

「馬鹿言え、あれぐらいで死ぬか！おめえ、そんなくだらん事で泣くな！」というエースだが、とても優しい目つきをしてる。彼も嬉しいがってる。

「泣いてねぇ。ないてねぇよ！」

「…もうそろそろいいか。」呆然と見続けたローは、やがて口を開けた。

「あ、こりゃ待たせて失礼。」

「ん？どうした、トラ男？」

「…おまえ、仲間を助けたかったんじゃなかったのか？」

「あ、そうだ！ゾロたちはどこ言ったんだ？」

「ルフィ…」大まかな話はもうすでにエースから聞いたから、ローが何を言おうとしてたのか見当が付く。だからって、その分楽になるわけではない。

「さっき言ったとおり、お前の仲間は…さらわれたんだ。」

「さらわれた!?」

ナミさんとチョッパー君は当然の反応。ゾロさんは黙って硬い表情で聞き続けてる。ルフィは…

「さらわれた～？」

間抜けな声で、手を頭の裏に置いたリラックスポーズで、その言葉を戸惑う。

「ああ、変な奴らに連れてかれた。」

「連れてかれた～？」

「ああ、間違いない。あいつらは、連れ去られたんだ。」

「あいつらが？」

…全然話が進まない。

「つまりだルフィ。変な霧があっただろ？お前の仲間を助けたければ、その霧から始めなきゃいけねぇんだ。」

「おお！」ポンと手たたくルフィ。「不思議霧をやっつければいいんだ！」

「あ、まあ、そういうことだ。」

「なんだ、そういうことか～。トラ男が分け分かんねえこと言うから～。」

「…」すっかり絶句したロー。ゾロは同情の目。

「はぁ…まったく…」ナミはあきれ返りながら、何か思い出したように、今度は私に向かってしかめっ面で怒鳴る。

「であんたはどうなのよ！」

「はい？」

「「はい」、じゃないわよ！仲間が大変なことになってる時に、あんた一人で勝手に出かけて…」

「いやだって黒丸が…」

「問答無用！あんたがいたら、どうにかなったかもしないものを…！」

「いや、それはない。強いものも落とし入れる霧だ。黒天使屋がいても、結果は変わらない。」

「じゃあ！もしあんたが森の中で襲われたら？あんた一人で…」

「大丈夫さ。ずっと俺が付いてたから、捕まえさせはしなかったさ。」

「…せめて私がこんな危険なところに…」

「それはただの悪あがきだろ。それにさらわれるよりはマシだろ。」

「あんたたちは黙れ！」交互に突っ込むロー、エース、ゾロに吹っ切れるナミ。うう…やっぱり言ってから出かけたほうがよかったかな…あ、でも。

「まあ、勝手に出かけたのは謝るけど、そのおかげですごいものが…」

「何よ！今更すごいものが出ても…」

「「幻のしずく」のありかがわかったのよ！」

「「幻のしずく!!?」」狙い通り、ナミ、ルフィ、チョッパーの三人が目玉光らせる。

「そうよ！黒丸は見つけてくれたのよ！その華麗なる秘宝の眠る門を！」

「野郎ども、いくぞぉぉぉ！」

「お宝〜〜」

「うおおお！俺もがんばるぞぉ！」

…あらら、船長と船医はともかく、航海士も駆け出しちゃった…って。

「ちょ、ちょっと、場所わかってるの？黒丸、いくよ！」

「おい、おまえ…」

「ゾロさんは絶対エースさんから離れない！」

「…！」

「…毎度、弟がお世話になってるようだな。」

「はぁ…また面倒ごとになりそうだ。ほらロロノア、ついて来い。」

「俺の弟の相棒を迷子にさせねえ！」

「うっせえ黙れ！」

〜〜〜

黒丸を先に行かせたのが正解だったみたい。さっき見つけた門の周りに、三人がいた。

ルフィとチョッパーは予想通りの反応。門の周りを探索し、ワクワク感をあふれさせる。私が見る限り。ただのコケだらけの石の遺跡にしか見えないが、二人にとっては、宝なんだろう。

「すげぇ！冒険のにおいがするぞ！」

「ホント！何もにおわねーぞ！」

「分からねーか？ゾクゾクするんだ！」

「おお！確かに、ゾクゾクする！これが冒険のにおいか？」

「ああ！すっげぇ冒険のにおいがする！」

ちょうどみんなが来たところで、ナミが発言した。

「これが、さっき言ってた…？」

「ええ。エースさんが言ってた「門」よ。私もよく原理がわからないけど…」

「まあ、俺も詳しいことは噂でしか聞いてねえからな。」エースはどこからもなく本を取り出し、パラパラとめくる。「最近、世界中に変な霧が広がって、それに入ったものが行方不明になってることを知ってるか？」

「いや、初耳だけど…？もしかして」

「そうか…いや、まだつながりがあるとはいえないけど…お前らはともかく、俺とローはその霧でここに連れて来られたらしい。」

「ええ！そんなことが可能なのか⁉」

「落ち着け、トニー屋。まだその霧なのか、それにまぎれて誰かがここに送ったのか。まあ、空島だということは、後者は難しいが。」

「ん？じゃあ、おめえらだけここに着たのか？白ひげ…のおっさん達は？」

「さあな。」エースは、困ったような顔で言う。「まだ新世界上か、ここにいるのか。無事かどうかすらもしらないんだ。」

「俺の仲間だ。馬鹿騒ぎばかりする連中だが…余りにも静かだ、今は。」

ああ、ベポさんたちのことだ。確かに、ルフィさんたちのように、賑わいがすごい。普段のローとは対照的に。やっぱり、ローさんも心配してるのか…

「…そうか。」それで納得したのか、ルフィはそれ以上追及しなかった。代わりに、再び門に注目を向ける。「で、これどうすればいいんだ？」

「そうだな…実は、ある人がここに入るのを目撃したんだ。」

「本当！その人に教えてもらえば…」

「その人がロビンたちをさらったんでしょうが！」

ナミさん、ナイス推理！

「まあ、それはわからねえ。しかし、まず俺たちが入るためには、夜にならなきゃいえねえんだ。後、なんか条件が必要みたいだが…少なくとも、時間はそうでなきゃはじまらねぇ。」

「そう、か…」ゾロはそこであくびをした。ま、まさか…

「寝る。」

…やっぱり。

「ちょっと、ルフィまで何言って…」

「「ぐおぉぉぉ…」」

「本当に寝るな！特に兄貴！」

でた…エースさんの悪い癖。

「チョッパー、これどうにかできない!?」

「ごめん！「すぐに寝ちゃってしまう病気」はまだ検索中なんだ！」

ウソップさん、また何か吹き込んだね…「えと、ローさん。いいんですか、これで？」

「かつての縁もある。麦わら屋はこういう男だ。今は何もできない。ゆっくりと体を休もうじゃないか。」

「はぁ…ふああ…」そういえば、なんか、疲れた…

「そんなこと…言っても…」

「俺…走ってばっかだから…」

あらら…ナミさんもチョッパーさんも寝ちゃったよ。

ま、いいかな。見聞色ですぐに危険は分かるし…ちょっと…シエスタでも…

「おいで、黒丸。」

静かに地面に仰向けになり、相棒をぬいぐるみのように抱きながら静かに落ち着く。意識が薄れ、眠りに入るのは時間の問題だった。

今日は…いろいろあったな…

そうのんきな事を最後に、考えるのをやめた…

深夜のこと。

不思議門の前に、七人の人物が寝転がってた。あるものは寝相悪く、ある人は静かに。状況を知らなければ、のんきにキャンプをやってるかのように見える。

ただし、テントは張ってないけど。

とたんに。

ブォン…

門の周りに、不思議な力が現れる。虹色に光る門には、誰も目は覚まさない。

やがて…門口が激しく光だし…

ポヨポヨ

～アイル視点～

「ん…ふああ…」

思いっきり腕を伸ばす。ん～、よく寝た～!!

ん～、何か船のベッドと違う感覚…

ああ、上陸したんだっけ…キャンプか～。よくエースさんたちとやったけど、ルフィさんたちとは初めてやることだよね～。

えーと、ここどこだっけ…

ツン…

「あ、黒丸。」

私の肩にはいつの間にか相棒の烏が乗っかっていた。なぜかしつこく私の頬をつついてる。彼のくちばしは妙にとがってるから、いやだっていつも言ってるのに。

ツンツン

「もう…何なのよ…?」

「ようやく起きたか、黒天使屋。」

「…?」

聞き覚えのある声。何だっけ…なんか寒いのと、暑いのを思い出す…

「しゃべる熊さん…」

「寝ぼけるな。」ボカ！

「いったぁぁぁ!!」激痛が頭から体中に走り、まるでナミさんと酒を飲んだ次の朝のような感じだ。「ろ、ローさん！そんな強く叩かなくても…」

「お前の間抜けさは麦わらレベルか？周りを見ろ。」

間接的にルフィさんに悪口を言ったローにムッと突っ張るが、すぐにローの言ってることがわかる。

まず、ここは寝てた森じゃない。変わりに、果て無き草原に、ぽつぽつと大僕が視界を広がってる。

二つに、その草原のところどころから無数の透明な球が湧き出て、フワ〜っと空を舞う。

不思議な景色だが…そこで私は、似たような風景を見たことがあるとわかった。

「…シャボンディ諸島？」

「お前もそう思うか…いい思い出がないな。」

「うん…私たちも…」

麦わら海賊団の、初めての大きな敗北…

って、悲しい思い出に思いふけてる場合じゃなくて。

「でも、どうして？私たち、確かナクロワにいて、で、空島で、しかも新世界なのに…」

「おい、落ち着け。それより、麦わらたちは…」

「あ、そうだ！こういうのあったっけ！ほら、トランスタウンで赤の男爵と戦ったときの…」

「何を言ってる…ともかく、まずはあれを何とかできないか？」

「え？」

ローが指差す場所を見ると、…

「うっは～～！」

「おもしれ～！プヨプヨだ～！」

「く…こりゃなかなかの訓練に…」

「すごい…ウェザリアの天候（ウェザー）ボールより弾力ありそう…」

「へへ…おもしれーな、こりゃ。」

シャボンを投げまくるルフィ、それに乗っかりトランポリンのように飛び回るチョッパー、なぜか一つのシャボンで刀を振り回すゾロ、

シャボンを手に取りその性質を興味深く観察するナミ。それを全て見守るエースは、こっち向いた。

「おお、起きたかアイル。おい、ルフィ、もうやめにするぞ！」

「ええ、やだ！もっと遊ぶぞ！」

「そうだそうだ！」

子供っぽいな。チョッパーくんもすっかりノリノリ。しかし、ルフィをよく知ってるエースもそう簡単に引き下がらない。

「そうか…じゃあ、この肉、もらって…」

「ああ、まて！俺が食う！」

ちょ…エースさん、どこから出した、その巨大な骨付き肉！しかもルフィさん、反応早いですよ！

「…えーと。」

「相変わらずだな…白ひげ海賊二番隊隊長とは思えん…」

「そ、そうでしたね…確かに。」

彼の戦いぶりや、仲間を守るために逃げぬ姿は見たことあるけど…こう、人間性を疑うほどの間抜けな姿を見るのが圧倒的な私にとっては、ローの呆れ感を分からなくもない。やっぱりルフィさんの兄と言う感じがする…

「ほんとはあれより礼儀がいいんですけどね。」

「…ああ。うっすらと思い出すな、ああいう姿。」もうすっかり驚く気力も失ったローは、硬直したままつぶやく。まさに「死の外科医」状態。

「ん！」ようやく私に気づいたのか、エースと肉を奪い合いを始めたルフィは、こっちに手を振る。

「おい、アイル、起きたか！超楽しいぞ、ここ！肉もうめえし！」

とたんにエースに巨大な肉の破片を奪われ、伸びる腕で取り返そうとする。

…まあ、あんまり悩んでも体に傷だしね。

「さっき寝たばかりだけど…もうちょっとくつろぎますか。」

「！てめえまで…」

「知ってるわよロー。私の仲間が心配かどうか、でしょ？」

図星かどうかは置いといて、私は奪い合う兄弟に振り向く。状況が状況で、その光景も余りいいものとは言えない。

でも、まあ…

「大丈夫よ。ルフィがあんな楽しそうだし。」

「…本当に、どっちが振り回されるのか…」

ついにローも落ち着く気になるらしい（普通の人なら、くつろぐ

チャンスに飛びつくはずが…)。とある大木に腰掛け、手を後ろにおいて頭を乗せる体勢で、「お前も、どうせはじめっからその気だろ？」

「そのとおり！」

すかさず両翼を生やし、腕を伸ばす。

「こんな空気のおいしいところで、羽休めをしてられますか！」

「…やれやれ。」彼女がいたところに静かに落ちる羽を見て、ローは暗く微笑む。

「あの時も、こんな感じだったな。退屈はしなさそうだ…」

「ふあああ…おはよう。」

「おはようございます、おぽっちゃま。実は…」

「…侵入者がきたみたい、って？言わなくても分かるよ…」

「そうでございましたね。いかがいたしましょう？」

「…とりあえず、新入りたちに任せたら？相手も相手だし、飛び切り強そうな奴を。」

「かしこまりました。では、すぐに。」

「…すぐに壊れないようにしてね。こっちも…楽しみたいから。」

創造力

…なんか、適当てことも、気をつけなきゃね。

適当…とは、もちろん船長さんのこと。

ルフィさん…危険性を感じなくて、冒険好き。だからいつも無鉄砲に突っ込む癖が付いてる。

まあ、それでこっちの命は何個あっても足りないぐらいだけど…それでこそルフィさんだから、いいか。

それはおいといて、と。

「…ルフィさん。どうしたんですか、それ。」

空を一回りし、みんなのところに帰って見たところ、彼は、シャボン遊びに飽きたらしく、今度は座り込みながら、彼にとっての最高の暇つぶしをすごしていた。

…たぶん、わかるんじゃないかと思うんですけど。

「ん?ん、んん〜ん〜」

「言ってる事がわからん。」

どこからもなく現れた肉を束で次々と口をいっぱいにする。

しかも…

「チョッパー、ちょっとこっちに来てくれないかしら？」

「ん？なんだアイル？」

「いや、ちょっとこれなんだけど…」

「…おおお！光ってる～！」

そのとおり。私の握ってる骨付き肉は、虹色に光っていた。不思議に、周囲と同じように。

「うん…ちょっとこれなんか危ないのかどうかチェックし…」

ビヨ～ン、ガシ!!

「…ってああ、ルフィ！」

「コラ、ルフィか！勝手に食べ物拾うな～！」

「んんん～ん～んん～！（だっておいしいんだも～ん！）」

しっかりモードに突入した重量強化（ヘビーポイント）チョッパーと、ルフィの奪いあいが始まってしまった。

「…」

「よう、どうしたアイル。」

「あ、エースさん、実は…ってあなたもですか！」

エースの片手に、とびっきりデカイ肉が握られててた。兄弟同士な

にやってるんだ…

「ああ、これか？やらねえぞ。」

「いや別にいらないって」

ＺＺＺＺ

「…もういいや。」すやすやと眠ってしまったエースさん。なんとなく想像できたけどね。適当に流すことになった。

そういえば、後の三人は…ああいたいた。

「だから何で俺がこんなこと…」

「うっさい！黙ってやんないと、借金三倍にするわよ！」

「…！」

「お前らで勝手にやるのはいいが…なんで俺まで？」

「あら、私に助けられた恩を返すつもりはないの？」

「は？いったい何の」

なんか途中からまずい方向いってるから無視してと。

そっちも突如何か現れたらしい。今度は虹色にきらめく巨大な宝石に乗っかり、ナミさんはゾロさんとローさんになんか支持してる。男二人とも刀を抜いてるところを見ると、何か彫刻でも切り取るのだろうか？…ローさん一人でも十分な気が…

「うーん…経験するにつれ不思議でしょうがないね～。どう思う黒丸…て。」

カ～？

「あんたもかぁ～！」

黒丸のやつ…虹色の高級そうなバードフードをかじってる。

「あんたいつの間に!?私を差し置いてあんなおいしそうなものを！（食べないけど）」

完全に自分の胃袋に集中してしまった使者に噛ま…いや突かれた気分だ。

「う～ん…みんなすき放題にやってますね～。なんか心外…」

私は…疲れた。ちょっと休むかな？ふかふかなベッドかなんかで休むかな…

「ああ…ここにしようかな？スポンジみたい…」

ふかふかな地面に腰掛け、眠りに…

「…って、え？」

…と思ったが。

「ん～？」

「あ？」

「何だ？」

ルフィさんとゾロさん、エースさんも気づいたのかな。ローさんも、警戒してる様子。見聞色とはいいものだ。

「なに…どうしたのよ、みんな？」

ナミも、雰囲気で何かおかしいと感じたみたい。と、そのとき…

「あぶねぇ！」

ブン！

一番早く反応したゾロは、ナミを強引に倒す。そうでもしなきゃ、ナミは今頃…

「くっ…こいつら！」

その頭上に、さっき戦った虹色の人影が、腕を振った後の状態で立っていた。

「あ、こら！肉返せ～！」

「焼き殺すぞ！」

い、今のはエースさん!? いつの間にかルフィさんと一緒に人影から肉を奪い返そうとしてる。チョッパーは、その人影を、頭脳強化（ブレーンポイント）状態のまま殴りまくるチョッパーだが、あまり効き目がない見たい。

「くそ…追ってきやがったか。」

ローさんは片手に刀を、もう片手で力を溜めてる。何をするのかは一目瞭然か。

だったら…

「黒丸！」

カァ！

私の相棒はたちまち鎌に変身し、私の右手に収まる。ちょうど人影が私の周りに集まってきたところで…

シャァァァーン

体を回転させ、切り刻む！

…しかし。

「ま、まだいるの？」

私がやったまもなく、すぐに何対か現れる。すぐに黒丸を構えなおすが…

「天使屋、伏せろ！」

「え？」

「ＲＯＯＭ」

「！」その言葉の意味を理解し、あわててうつ伏せになる。

す…

真上になんかかする音がしたと思ったら、次々と人影が消滅する。

と同時に、次々と現れる。

「く、きりが無い…麦わら屋！」

「象（エレファント・ガン）銃！」

ボッゴォォォン

「ン？なんかいったか、トラ男？」

「ひとまずここを引くぞ！さっさと逃げろ！」

「「えええええ!!」」

「麦わらはともかく…なんでエースとナミもだ！」

「ちょっと！海賊ならもっと宝物に目がないように…」

「あいにくだが、俺は医者でね。」再びＲＯＯＭで敵を切り裂くローさん。「金の心配をしてる暇あったら、さっさと逃げろ！」

「でも…」

ドスン

「…！」

見聞色で、後ろにさらに敵が現れたのに気づけたものの…その後がだめだった。

ギャリン！

「あ、黒丸！」

恐るべき強力で武器を飛ばされてしまった。

あわてて後ろを向くと、一回り大きな人影が三体並んでた。チョッパーの重力強化（ヘビーポイント）に、腕力強化（アームポイント）の腕を付け足したような、超パワーファイターのようだ。しかも私に一番近い一体は、片手は拳の変わりに大槌の頭となってる。黒丸を飛ばしたのに使ったんだろう。

「く…黒丸の仇！」

死んでないと知っててても、黒丸にひどいことをした一体に、指を突き立てる。

「指銃！」

指を弾丸並みの硬さと速さで飛ばすが…

「…！ぐ…」

「アイル？」

真っ先によってきたのがルフィ。後ろに少しよろけた私を、驚くべき優しさで受け止めた。

「ル…ルフィさん…指が…」

いうまでもない。私の指…妙な角度に折られてしまってる。

雑魚のはずなのに、なんて硬さ…

「…！麦わら屋！」

ローさんの叫び声で、われに返る。

いつの間にか、無数の人影に囲まれてしまった。小さいのが集団として、ところどころ馬鹿力の奴も。

「うわああ～～～～！囲まれた～～！」

「アイルがあれ一体に適わないのに、何体いるのよ！」

「…！」

ゾロは、三本とも刀を抜き、エースは体中に炎を生む。ローさんは手を広げ、ルフィは私を下ろした後、対戦姿勢となる。

静かになる空間。しかし、その殺気は治まらない。

…前触れもなく襲い掛かってしまった人影に囲まれながら…

「やっぱり、適当はちょっと危険だね…」

ちょっと暢気にに私はつぶやいた…

「…ちっ。逃がされたか。」

草原に残されたのは、大量の肉、クリスタル、なんかわからない粒の山。

そして、七個の石ころ。

「トラファルガー…気づきやがったのか。この世界の性質に。…まあいい。そのうち見つかるだろう。それまでの辛抱だ。」

男はつぶやいた後、現場に背を向き去ってゆく。

…金属のようにきらめく右腕をぶら下げて。